

令和4年度 フランス国立パリ聾学校（INJS）とのオンライン交流

田中 豊大・澤口 真弓・田万 幸子・久川 浩太郎

筑波大学附属聴覚特別支援学校は、平成15年にフランス国立パリ聾学校と姉妹校協定を締結して以来、相互訪問による交流を重ねてきた。令和元年度以降、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、訪問による交流に代わり、オンラインによる交流を継続実施している。令和4年度も、11月にオンラインによる交流を行った。オンライン交流の実践を通して、生徒の異文化に関する興味関心の高まりが示唆された。また、伝達方法を柔軟に工夫することによって自分の伝えたいことを伝えようとする交流への積極的な態度も見られた。さらに、事前学習や交流当日の生徒の様子に加え、事後に実施した生徒へのアンケート調査の結果では、生徒の異文化コミュニケーションに対する考えの変容が示された。オンライン交流を円滑に進めるためのICT機器等の環境整備においても、生徒の意見を参考にしながら改善的な取り組みを行い、一定の効果が見られた。

キー・ワード：国際交流 オンライン交流 コミュニケーション 異文化理解 外国語学習 ICT

1 実践の経緯

筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下、本校）とフランス国立パリ聾学校（Institut National de Jeunes Sourds de Paris：以下、パリ聾学校）との交流は、平成15年の姉妹校協定の締結から始まり、オンライン交流は平成25年度より行っている。平成25年度のオンライン交流は、本校からパリ聾学校への最初の訪問時に、本校寄宿舎との間で行われた。本校寄宿舎には高等部普通科の生徒も数多く在籍していたが、通学生はこの交流には参加できなかったため、平成28年度からは放課後の時間を利用してオンライン交流を行った。その結果、異文化理解やコミュニケーション能力の向上など、オンライン交流を活用した国際交流の効果が示唆された。

令和元年度以降は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、現地に訪問する対面での交流を行うことができず、代わりにオンラインでの交流のみを実施している（田中・澤口・田万・久川, 2022）。

令和4年度は、オンラインによる交流を2回行うことを計画した。本稿では、11月に実施した交流における方法や内容、国際交流に対する生徒の意識の変容、今後の実施に向けて改善すべき課題について報告する。

2 実施のための手続き

（1）担当教員同士の事前打ち合わせ

オンライン交流を計画するにあたり、事前にパリ聾学校と本校高等部普通科の交流担当教員（英語科）が年度当初からメールで連絡を取り合い、時差を考慮した実施日時や、交流の回数、参加する生徒の人数、実施の方法、内容等について検討を重ねた。また、前年度までのオンライン交流で挙げられた使用する機材やアプリケーションにおける反省点について共有し、情報保障の仕方を含め、生徒が画面上で交流しやすい環境を整備することについて双方で確認を取り合った。

フランスと日本の時差は8時間（冬時間）であるため、日本時間の16:30（フランスは8:30）から、1時間程度交流を行うこととした。これは昨年までの交流実績と同様である。

交流の際には、日本とフランスの共通の学習言語である英語の使用をメインとしながら、手話や母国語を組み合わせながら、総合的な方法でコミュニケーションをとることを確認した。

また、パリ聾学校の交流担当教員から、自校生徒の英語学習の進捗が分かる参考資料として、生徒が授業等で書いた英文のPDFデータが送付された。生徒の実態に合った交流の内容を検討していく際の一助となった（Fig. 1）。

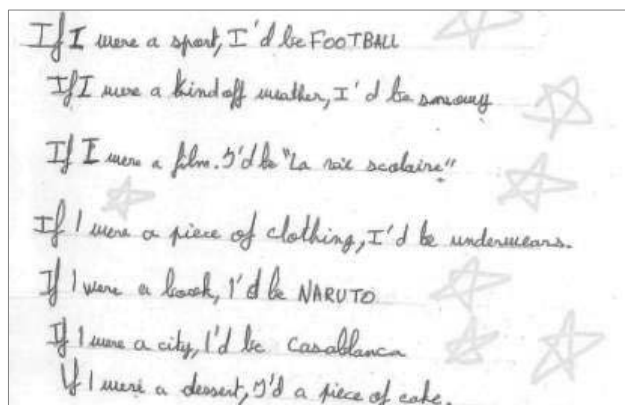


Fig. 1 パリ聾学校の生徒が書いた假定法の英作文

(2) 参加生徒の決定

高等部普通科の生徒 74 名に対し、朝礼等で事前に呼びかけを行い、オンライン交流への参加希望を募ったところ、23 名が参加を希望した。

近年、オンライン交流への参加を希望する生徒は増加傾向にある (Fig. 2)。これは、令和元年度まで実施していた現地への訪問交流に参加する生徒に対する事前学習を目的としてオンライン交流を実施していた時に比べ、参加に対する気軽さが増したことに起因すると考えられる。希望した生徒は、他の学校行事との重なりがない限り、原則として全員が参加している。令和4年度は、1 年生 9 名、2 年生 6 名、3 年生 2 名、見学者 4 名、合計 21 名が当日の交流に参加した。

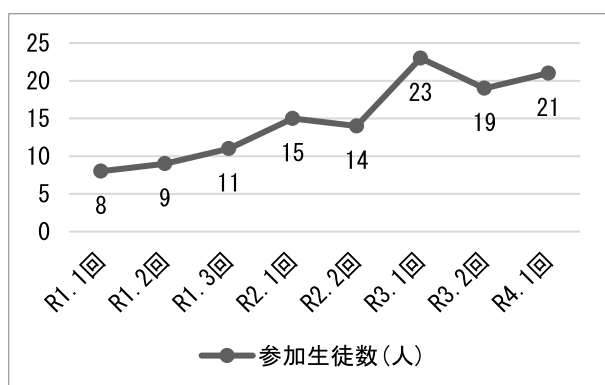


Fig. 2 交流に参加する生徒数の推移

3 オンライン交流の実践

令和4年度は、前年度までと同様に Web 会議システム Zoom (以下、Zoom) を使用して、11 月と 1 月に 1 回ずつ計 2 回のオンライン交流を行うこととした。

(1) 第 1 回事前学習 (11 月 9 日 12:50~13:15)

参加を希望した生徒を対象に事前学習を行った。教師が進行役となり、前年度までの交流の様子を伝えながら、今回の交流ではどんな活動を行いたいかな意見を募った結果、日本の文化を紹介する活動を行うこととなった。参加人数の多さに鑑みて、一人一人が発言できる機会をつくるために、3 つの発表グループに分けることとした (Table 1)。発表テーマは、教師が進行役となって生徒の意見を集めながら 3 つに決定し、その後は生徒が主体となって話し合い、グループ分けや発表内容を決めた (Fig. 3)。

Table 1 発表テーマとグループの構成人数

発表テーマ	1 年生	2 年生	3 年生
「日本の食事」	5 名	3 名	0 名
「日本のスポーツ」	0 名	3 名	2 名
「日本の名所」	5 名	1 名	0 名
(見学者)	4 名	0 名	0 名



Fig. 3 グループでの話し合い

発表に際して、PowerPoint のプレゼンデータを補助的に用いて画像やデータなど視覚的な情報を提示しながら日本の文化を紹介することにした。前年度までは、「ロイロノート・スクール」のカードに文字や写真を掲載し、提出箱に提出することで、教師と生徒のスライド資料のやりとりを行っていたが、今回は Microsoft Teams で各発表グループのチームを作成した。そのチーム内で PowerPoint のデータを添付することにより、教師と生徒のやりとりがスムーズになり、また同時編集も可能となった。前年度の反省を生かし、交流校の生徒が画面上で見やすいように、文字は 40 ポイン

ト以上の太くて見やすいフォントで作成するように指示した。また、発表の間延びを防ぐために、各グループの発表時間を5分程度とした。

(2) 第2回事前学習(11月16日12:50~13:15)

オンライン交流2日前の打ち合わせでは、当日の予定や発言者の立ち位置等を確認した上で、それぞれの発表グループの準備の進捗を確認した。Microsoft Teams で事前に提出された PowerPoint のプレゼンデータの内容をスクリーンに投影して、参加者全員で見て共有し、当日の参加意欲を高めた。文字の情報はキーワード程度に留められ、画像を多く載せて作成されており、相手校の生徒が見やすい工夫がされていた。

また、事前学習として、フランス語とフランス手話の基本表現を学習する機会を設けた。動画共有サービス YouTube を用いて、フランス語とフランス手話を用いた基本的な自己紹介や挨拶表現の動画を視聴した。また、フランス語の学習経験がある教員が、挨拶や日常会話表現などの基本的なフランス語表現とフランス手話表現を指導した。前年度までの交流に参加した生徒を除き、学習歴がない生徒がほとんどだったため、「Bonjour」や「Merci」などの基本的な表現を中心に行った。積極的な態度で練習する生徒の様子が見られた (Fig. 4)。



Fig. 4 フランス手話(指文字)の学習場面

(3) オンライン交流実践(11月18日)

① 機材や教室内配置

オンライン交流は、参加者全員が集まれる多目的スペースで、常設されている大型のスクリーン

とプロジェクターを使用して行った。通信機器については、本校のコンピュータとパリ聾学校のコンピュータをインターネットに接続し、Zoom のミーティング機能を使用することで交流を行った。

発表者の撮影に当たっては、Webカメラを外部入力で使用し、コンピュータの内臓カメラよりも広角かつ精細に映すことに配慮した。また、生徒が作成した発表用のプレゼンデータは、Zoom の画面共有機能を使って、画面上に映し出した。

前年度に参加した生徒と担当教師から、「機材の配置や参加者の人数の多さの面から、他のグループの発表内容やチャットの文字情報を同時に全員が理解することには厳しさがあった」という意見が散見されていた(田中・澤口・田万・久川, 2022)。前年度に続き、今回も本校の参加生徒は20名を超えており、同様の問題が生じることが予測されたため、今回の交流では、発表者用のコンピュータ1台の他に、2台のコンピュータでZoomのミーティングに参加し、それぞれを教室の後方の大型テレビに接続し、サブモニターとして使用した。全ての画面で、①Zoomのミーティング画面、②発表用プレゼンデータ、③生徒が意見交換をしたり、本校とパリ聾学校の教員同士が必要な連絡を交わしたりするためのチャット画面を同時に見られるようにした。これにより、参加している生徒が、教室内で物理的に分散することが促され、一人一人がより近くで画面の情報を得る事が可能になった (Fig. 5)。

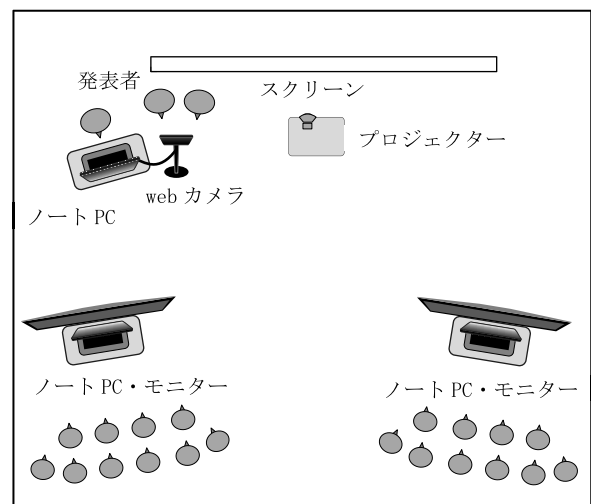


Fig. 5 教室内の配置

② 交流の内容

パリ聾学校からは10名の生徒がオンライン交流に参加した (Fig. 6)。交流の初めに、本校の生徒とパリ聾学校の生徒が自己紹介をした。本校の生徒はフランス手話の指文字で自分の名前を示した後、サインネームを伝えた。事前に覚えた「Ça vas? (調子はどう)」や「Merci. (ありがとう)」の手話を織り交ぜることで、相手校の生徒が笑顔で反応する様子に喜ぶ姿が見られた。



Fig. 6 パリ聾学校の交流中の様子 (Zoom)

次に本校の生徒がグループ発表を行った。発表の合間には、相手校からの質問の時間を設け、双方向のやりとりを深められるように配慮した。

「日本の食べ物」のグループは、寿司や天ぷらなどの日本の伝統的な料理を紹介した後に、一般的な朝食や、生徒自らの弁当の写真を見せることで、身近な食べ物や日常の食生活についても紹介した (Fig. 7)。パリ聾学校の生徒から、「Why do you always eat rice? (どうしていつも米を食べているの?)」や「Why don't you have any cake in your food? (どうしてケーキを食べないの?)」という質問が挙がり、本校生徒はチャット機能を使って英語で「Because it's tasty. (おいしいからだよ)」や「Cake is not meal. (ケーキは食事ではないよ)」などと答えることで会話を楽しむ姿が見られた。



Fig. 7 「日本の食べ物」の発表

「日本のスポーツ」のグループからは、まず相撲や剣道や空手など日本独自のスポーツについて紹介された。その後、野球やサッカーなどにおいて国際的に活躍する選手が増えてきていることに触れ、日本の選手が幅広い種目において功績を残していることについて発表した。発表後、パリ聾学校の生徒の一人が、「I played karate when I was 12 years old. (12歳の頃、空手をやってたよ)」と話し、同じく空手の経験のある本校の生徒が英語で反応する場面が見られた。また、パリ聾学校の卒業生がデフリンピックで銀メダルを獲得したエピソードを聞き、本校の生徒がジェスチャーで称賛する姿も見られた。

パリ聾学校の生徒からは「パリの食事」「パリの名所」「フランスの有名人」について発表があった。本校と同様にプレゼンデータで視覚的な情報が補われており、本校の生徒は熱心に画面の情報を得ようとする様子が見られた。発表終了後、チャットでフランスの有名人の話題を振り返ると、「好きな映画は何か」という話に自然に転じていった。チャットでの英語のやりとりだけでなく、カメラに向かって映画の有名なシーンをジェスチャーで伝え合う姿も見られた (Fig. 8)。また、チャットではなく、紙に英語やフランス語を書き、カメラに映して質問や回答を伝えるなど、生徒によって様々な伝え方で関わった。

また、パリ聾学校の教員がZoomに使用しているカメラを動かして、教室全体を映し、普段学習している教室環境を紹介する場面もあった。「この窓からはエッフェル塔が見える」という説明を一生懸命聞く本校の生徒の姿が見られた。



Fig. 8 チャットとジェスチャーで伝えている場面

4 アンケート調査

オンライン交流実施後、Microsoft Forms を使用した選択式及び記述式の電子アンケート調査を参加者に実施した。選択式の質問は 10 項目で、それぞれの質問項目について、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの 5 件法で回答を求めた。各質問項目の回答を、「とてもそう思う＝5 点」、「そう思う＝4 点」、「どちらでもない＝3 点」、「そう思わない＝2 点」、「全くそう思わない＝1 点」として、平均を集計した (Table 2)。

Table 2 電子アンケート調査結果 (n=15)

質問項目		平均
①	発表では交流相手にわかるように工夫した。	3.9
②	準備や練習の時間がもっとほしかった。	3.7
③	交流時間 (約 1 時間) は短かった。	4.1
④	今回の交流を通して、外国語に興味をもった。	4.5
⑤	今回の交流を通して、外国語をもっと学習したいと思った。	4.3
⑥	今回の交流を通して、フランスの手話に興味をもった。	4.1
⑦	今回の交流を通して、フランスという国や文化に興味をもった。	4.3
⑧	今後も国際交流に取り組んでみたい。	4.4
⑨	オンライン交流ではなく、実際に現地に行きたいと感じた。	4.6
⑩	今回の交流は、社会人になったときに役に立つと思う。	4.2

選択式の質問 10 項目のうち、①、⑨、⑩については、選択された答えについてさらに深めるために、記述式の質問による回答も併せて求めた。

①については、理由について記述式での回答を求めたところ、「スライドに写真を多く入れたか

ら」「相手校の生徒に見やすいように大きな文字を使用したから」など、PowerPoint でプレゼン資料を作成した際に工夫した点に関する記述が多かった。相手に伝わりやすい方法を考えながら発表準備を進め、さらに生徒自身も当日の発表を通じてその効果を実感していることが示唆された。

⑨については、「とてもそう思う」「そう思う」と答えた生徒に対し、具体的に現地でどんな交流をしたいかについて記述式で回答を求めた。「パリ聾学校の校舎内がどうなっているのかを知りたい」「対面で手話を使って話したい」「フランスの町を案内してもらいたい」「パリ聾学校の生徒と一緒にスポーツや伝統遊びをしたい」など様々な意見が見られた。その中で、最も多くの生徒に共通して見られたのは、「パリ聾学校の生徒と一対一でコミュニケーションをとりたい」という意見だった。これまでのオンライン交流を通して、できる限り一人一人が発言できるように改善を図ってきたが、20 人の参加者に対して、3 台の回線であるため、一人一人の繋がりには依然として薄く、生徒自身も個人とのより深いコミュニケーションを求めているということが示された。

⑩については、回答の理由について記述を求めた。回答の中には、「グローバル社会が進む中で、外国の人と関わることができたのは、いい経験だったから」「現在、グローバルな人材が求められる社会だから」といった国際化する社会へ順応する必要性や意欲について言及する記述が複数見られた。また、「伝えたいことがあっても、自然なスピードのやりとりの中では、普段使っている英語の表現でさえ思い浮かばないことが分かったから」という意見も見られた。英語の授業で学習したことを、実際のコミュニケーションに運用することについては課題がある、ということを生徒自身が実感していることが示された。

電子アンケート調査では、これらの他に、5 つの項目について自由記述の調査も行った。質問項目と代表的な回答は、以下の通りである。

① オンライン交流で印象に残ったこと

「日本の手話とフランスの手話が似ているものがあったこと」「パリ聾学校の生徒から、日本人は

なぜ制服を着るのかと質問されたこと」「盛り上がる話題が日本人もフランス人も同じで、感性が似ていると感じたこと」「パリ聾学校の生徒が、自分たちの発表についてたくさん質問してくれたこと」など、想像しなかったコミュニケーションの展開に対する気持ちや、相手と伝え合うことができたことの喜びについての回答が多かった。

② オンライン交流でうまくいったこと

「自分の発言に対して、パリ聾学校の生徒が自分と同じ手話表現で返してくれたので、思いが伝わったと感じられ嬉しかった」「PowerPointで作成したスライドにより、相手の伝わりやすい発表ができた」「チャットで英語での会話が成り立ったことが嬉しかった」など、自分の働きかけに対し、相手校の生徒から反応があったことで、やりとりが成立したことを実感し、喜びを味わえたことを振り返る記述が多く見られた。

③ オンライン交流でうまくいかなかったこと

「質問が多すぎて、チャットでの回答が追いつかなかった」「チャットで複数の話題が同時進行していて分かりづらかった」など、チャットでの話題が拡散的になってしまったことを振り返る回答が多かった。また、「英語力が足りず、伝えたいことが伝えられなかった」という自らのコミュニケーションに関する力や外国語学習への課題を示唆する記述もあった。

④ 機材や設備の面で気付いたこと

「画面が複数台あってよかった」「Zoomとチャットとプレゼンデータが同時に映し出されて分かりやすかった」という意見が複数挙げられた一方で、「もっと画面を増やしてほしい」「もっと大きな画面で見たかった」という意見も見られた。

⑤ 次回のオンライン交流で取り組みたいこと

「ジェスチャーゲームをして、日本人が一般的に使うジェスチャーが外国人にも通用するのか知りたい」「パリ聾学校で行われている授業の様子を知りたい」「ゲームやレクリエーションを一緒に行い、言葉が分からなくても意思疎通したい」といった回答があった。また、この項目では、「オンラインではなく、フランスに実際に行き一人一人の生徒とお互いの国について紹介し合いたい」とい

った訪問交流に意欲を示す回答も多く見られた。

5 今後の課題と展望

交流の様子や事後調査の結果から、オンライン交流を通して、生徒が自分と異なる言語や文化、生活様式についての関心が高まったことが示唆された。また、自らの外国語学習について振り返るきっかけとなり、学習方法の改善や、今後のさらなる学習に意欲を示す生徒も確認された。

オンラインでの交流では、参加することに対して意欲があれば、大人数であっても比較的容易に交流の機会をもつことができる。しかし、個人と個人のやりとりを深めるという目的においては、現在の方法だと対面型に劣る。生徒の中には、一対一でのより深いコミュニケーションを希望する者もいることが明らかになった。今後の実施にあたっては、交流の目的を明確にし、生徒と事前に共有しながら立案していきたい。対面での交流が再びできるようになることを望むが、オンラインでの実施であったとしても、生徒一人一人のニーズに耳を傾けて、生徒が主体的に相手校の生徒と交流できる環境を設定していきたい。そのために、ICT機器を柔軟かつ効果的に活用したい。

【付記】

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。

【参考文献】

- 田中豊大・澤口真弓・田万幸子・久川浩太郎 (2022) 令和3年度フランス国立パリ聾学校 (INJS) とのオンライン交流. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要. 44, 65-70.
- 澤口真弓・田万幸子・久川浩太郎 (2021) 令和2年度フランス国立パリ聾学校 (INJS) とのオンライン交流. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要. 43, 62-66.
- 久川浩太郎・澤口真弓 (2020) 令和元年度フランス国立パリ聾学校 (INJS) とのオンライン交流. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要. 42, 81-85.